

鷗外の翻訳文学(五)-鷗外の女性観とリルケとの交渉を饒って-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 田人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4849

鷗外の翻訳文学 (五)

——鷗外の女性観とリルケとの交渉を饒って——

大 島 田 人

その終楽章がそうであるが故に「トルコ行進曲のあるソナタ」と呼ばれている有名なモーツアルトのピアノ奏鳴曲

(K. 331)の第一楽章(アンダンテ・グラチオソ⁶/₈拍子)の主題は、母を失ったばかりの彼が、母への思い出を綴ったも

のと云われ、「吾が母の教へ給ひし歌」として、「吾が心、喜べよ、悩みを思わず……」という歌詞があったとも伝えら

れるが、小泉純一をして「國の亡くなったお祖母あさんが話して聞かせた傳説」と云わせている「山椒大夫」を鷗外が書き

あげたのも、彼の母がとみに衰弱の度を加えて、死期の近いことを予想させるようになった大正三年十二月のことであつ

た。註(大正四月一日「心の花」に掲載)「一幕物」に仕立てようとして実現に到らぬ儘に温存されていたこの物語が、彼の所謂「歴史離れ」の意図を

具体化する上に恰好の素材であったには相違なからうが、それが折も折、母の死(大正五年)を目前にして、再度採りあ

げられたということは、果して単なる偶然の一致であろうか。母の愛唱歌を口ずさみ、鶯ペンを五線紙に、指を鍵盤に

走らせながらK. 331ソナタを作曲するモーツアルトの脳裡には、母の思い出の数々が走馬燈の様に駆け巡り、彼の泣き

濡れた眼には、若き日の美しい母の懐しい面影が、彼の半身を宿して鈍い光沢を放つピアノの側面に彷彿と over-lap

していたことであろうが、「山椒大夫」の筆を進める鷗外の脳裡にも、所謂「男まさり」で、「家内の一部から意地の強

い人」と思われる程に理智の勝った女性で、「余り進取的でない夫」を助けて、「柔に勤めもし、強く諫めもし」て過失なきを期し、「乏しい家計を切り盛りして、子女の育成に全精力を傾注した五十年余の生涯」、それは、「そのすべての望みが満ちたりた筈の」「晩年」に到っても、自分達夫婦の為に、「小さい時から苦勞を掛けてゐながら」「なほ全き和らぎに身を浸すことを得ず」「結局はかなくも、さびしい、そして平凡な女の一生ではなかったか」と思うと、心からの尊敬と感謝を捧げて已まなかつた彼だけに、様々の母の思い出が、それが既往に溯れば溯る程、「夢のように」美しく懐しい衣裳を纏つて甦つて来たのであろう。利他的であり非利己的であるが故に、総ての感情的絆の中で最高の愛であり最高の徳であると看做されている「母性愛」も、それが最高度に發揮されるのは、未だ子が幼くて、完全に母親に依存している間だけで、子供が成人して母親の胸から抜け出して行くにつれて、「最高の愛」「最高の徳」と神聖親された筈の「母性愛」は、稍もすれば、「偏愛」とか「盲愛」とか、悪意ある言葉に置き換えられ、「利他的・非利己的な性格」は一転して、最も「利己的」なそれへと変貌すると云われるが、確かに、老醜を曝らし、しげ夫人の姑として彼を悩ました峰刀自は、彼にとって、決して「ある可き」母の姿ではなかつたであらう。だが、「現実の母」の姿がそうであれば尚更、遠い過去の思い出の中の、最も美しい姿に於いて彼女を繋ぎとめたかつたのではあるまいか。母に対して終生変らぬ尊敬と感謝を捧げたのも、「母親の命令には絶対服従であつた」(小堀杏奴「晩年の父」)のも、「孝」の徳目を重んじたのも、すべては、彼の「悟性」のなせる業でもなければ、「教え込まれた」或は「先験的」な倫理観でもなく、やはり、彼の幼少の頃の思い出の裡に生きている「ある可き母」のイメージがその根柢となり、それが彼の「叡智」によって処理されて、そうしたかたちをとつたのではあるまいか。「どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出来ない」鷗外、「青い鳥を夢の中に尋ねてゐる」鷗外の姿がここにも見出されるのではないか。「戀しい、美しい、懐かしい夢の国としての『故郷』と、「自分の研究しなければならぬことになつてゐる學術を眞に研究するには、その學問の新しい田地を開墾して行

くには、まだ種々の要約の闕けてゐる國」のそれとは、將に「歴史離れ」と「歴史その儘」の關係に照応し、「ある可き女性」の姿と、現実のそれとも呼応するのではないか。

「山椒大夫」が「安壽」の獻身にスポットを当てて画かれていることは、「一寸氣象のある女」が鷗外の好む女性のタイプの一つであつたことと共に既に多くの研究家によって指摘されている。岸田美子さんは、この辺りをとり纏めて、「一寸氣象のある女の氣魄が高まつた究極」が「この獻身といふ事になるのではないか」とみているが、私は更に、この「女の氣魄」を高からしめるもの、の根柢に、「母性愛」の潜在しているのを認め度い。「厨子王」をして「姉えさんのけふ仰やる事は、まるで神様か佛様が仰やるやうです。わたしは考を極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします」とまで感動せしめたのは、安壽の裡に母性愛の強烈な発動を認めて、そこに無限の信頼を寄せ安心を得たからではあるまいか。私はここでも、「父は母の命令には絶対服従であつた」という小堀杏奴さんの追懐の言葉を思い出す。

この安壽の獻身に連つて思い起されるのは、「山椒大夫」が発表された大正四年の十月に書かれた「最後の一句」の「桂屋太郎兵衛」の長女「いち」のそれである。入水した時の安壽が十五歳、いちは十六歳、いちの異腹の弟で姉と共に奉行所に赴く「長太郎」が十二歳、厨子王は十三歳と、年恰好も殆ど同じである。而も、厨子王は陸奥椽正氏の嫡男、長太郎も桂屋の跡取り。二人共に姉から「家」の再興の使命を託されているのである。そうして、末尾に到つて、「元文頃の徳川家の役人は、固より『Martyriumマルチリウム』といふ洋語も知らず、又當時の辭書には獻身と云ふ譯語もなかつたので、人間の精神に、老若男女の別なく罪人太郎兵衛の娘に現れたやうな作用があることを、知らなかつたのは無理もない」と記されている。然し乍ら「いち」は「安壽」とはまた違ったタイプの少女である。「いち」には「女丈夫」の面影がある。鷗外は白州での取調の条を書くとき、フレンツェル (Karl Wilhelm Frenzel) の「女丈夫」(Charlotte Corday) ……明治二五年八月「國民の友」に抄訳…の法廷の場面を思い浮かべていたように思われてならない……否

々、裁判長は人の心といふものを知り玉はぬにこそ、かほどの大事を成さむには、わが念力を頼まむことおもひの外に容易かるべく、人のすすめに依らむことなかなかむづかしかるべし……とは、「いえ、申した事に間違はございません」と言い放ついちの言葉の翻訳にほかならない。「安壽」が「早くお父様の入らつしやる處へ往きたいわね」とじれて、弟の厨子王から「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ」と賢しげに窘められ、「さうですとも。今まで越して来たやうな山を澤山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かれないのだよ。毎日精出して大人しく歩かなくては」と母に諭されてもまだ、「でも早く往きたいのですもの」と駄々を捏ね、伊勢の小萩からもその無邪気さを愛されて、姉妹の誓をし、「日の暮を待つて小屋に歸れば」弟と「手を取り合つて筑紫にゐる父が戀しい、佐渡にゐる母が戀しいと、言つては泣く」といつた如何にも穉い少女として印象づけられるように書き出されているのに対して、「いち」は「當年十六歳にしては穉く見える、瘦肉の小娘」とあるだけである。従つて、その穉さは、身代りを決意してからの彼女の上に余り色濃く投影して来ない。「男勝り」の「女丈夫」といつた印象が強いのは、そうした二人の描写の違いからも来ているのかもしれないが、後半でも、いちが「最後の一句」に「獻身の中に潜む反抗の鋒」を鋭く閃めかしているのに対して、安壽のそれは賢くはあるが終始忍従内至無抵抗の姿勢に於いて提示されている。それは、結局同じ「歴史離れ」の意図のもとにもされた作品ではあつても、むしろ「諷刺小説」の色彩の強いそれと「メルヒェン」との相違に帰するのかもしれない。メルヒェンであればこそ、稚い頃の思い出の中に生き続ける「いち」よりも更に高い次元に於ける「ある可き」母の倂をその儘に安壽を画くことができたのではないか。

鷗外が心惹かれた「一寸氣象のある女」は、その「獻身」の姿勢に於いて、大体三つの型に分けられる。創作では「うたかたの記」のマリイや「文づかひ」のイイダ姫、翻訳では「女の決闘」…オイレンベルク (Eulenberg) 明治四四年…の女房、「山彦」…ヒツペル (Hippel) 明治三五年「芸文」…のレナアテ・ヘルエエゲ、ズウデルマン

(Sudermann)の「花束」(Mergo)……明治四一年「歌舞伎」のマルゴオ、「寂しき人々」(Einsame Menschen)のメン・マアル、イプセンのノラ、熟れも「張りの強い、気の勝った」女性達であり、訳出の動機もまたそうしたタイプの女性への関心にあつたに相違ないが、彼女達の「献身」は、彼女達の「我」へのそれである。所謂「利己的個人主義」である。「自然主義的な本能的自我」への「献身」である。「雁」のお玉もその萌しを示している。これがその一つのタイプ。

「安壽」や「いち」は、その「本能的自我」を越えた所謂「利他的個人主義」の實踐者として描かれているが、この型は更に二分されて、「女丈夫」型と、「理想的母性」型になり、鷗外は安壽を「見果てぬ夢」「美しい夢」の裡にそつと生きる唯一人の女性として、彼女の献身を最高の次元に置いている。而して、エリス・るん・品・佐代・五百・デヘル (Dehmel) の「顔」(Das Gesicht)……明治四二年「心の花」……の妻、シュニツラア (Schriber) の「みれん」(Sterben)……明治四五年「東日」……のマリイ、溯つては、「即興詩人」のアムンチャタ……これ等の女性群像は、悉く第二の型か第三の型に近い。「一寸氣象のある女」達ではあるが、「賤妓にも乞食の娘にも一寸氣象のある女といふものは有之候學問にも何も依らず候」(書簡)、「家畜の群の女の中にも貴婦人の及ばぬ女がある」(假面)と云つてのける鷗外は、「黄金杯」(Sara Malcolm)……ワッセルマン (Wassermann)……明治四一年「明星」……のサラア、レンジェル (Lengyel) の「豪光」……大正三年「番紅花」のフィルツアアのような無智な下婢や無邪気で癡であるが故に巧まずして捨身になれる女達の「没我」の「献身」をも見逃してはならないのである。鷗外のあとを追うて遙る／＼日本までやつて来た現実の「エリス」も確が「少し足りない位に思はれる」善人であつた筈である。だが、第三の型の典型は「安壽」唯一人である。そうして、「山椒大夫」と云う素材が「歴史離れ」したさに書こうとする作品のそれとして採りあげられ「安壽」の献身が文字通り「女性の」それとして書き出されているのは、やはり私がこの稿の冒頭に示したような場面

構成があつたからだと解釈せざるを得ない。鷗外にとって「山椒大夫」の素材は正しくモーツァルトの「吾が母の教へ給ひし歌」だったのであろう。

それにしても、鷗外の歴史小説には、岡崎義恵氏も指摘されている様に自己の外にある或る目的の為に己を犠牲する者が多く登場する。「安壽」も「いち」も例外ではない。そこで暫くこの二人の獻身も「母性型」とか「女丈夫型」といった枠付からはずして、鷗外の所謂「老若男女の別なく……」の裡に一応解消した上で、「獻身」或は「利他的個人主義」といった甚しく理想主義的神秘主義的な考え方がどの辺りからひき出されて来たものかを探ってみることにする。

「理想的な自我の姿を現実の自己及び自己の周圍から超越した過去の人物の中に見出」そうとする彼の試みは、乃木夫妻の殉死への感動が契機となつて実現したと云われるが、宗教と理性、全と個、神話と歴史といった課題を採りあげた所謂「五條秀麿」ものの系列に於いて追求されて来た「絶対的權威」に対する「自我」と共に、この問題が「妄想」や「青年」の系列に於いて提起され、この二つの流れが「殉死」事件にぶつかり、大きく溢れて一本の流れとなつたのが歴史小説だともいえるのではなからうか。ところで、「正直に試験して見れば、何千年といふ間満足に發展して来た日本人が、そんなに反理性生活をしてゐよう筈はない。初から知れ切つた事である」と云う鷗外の悟性に少なからず満足を与えたであらうと思われるこの理想的自我へと彼をみちびいたものは何だったのだろうか。

ここで、「元文頃の徳川家の役人は、固より「マルチリュウム」といふ洋語も知らず、又当時の辭書には獻身と云ふ譯語もなかつたので……」の条を思い起してみると、どうやら、「獻身」とは「舶来」の「現代思想」であるらしい。そこで、その「舶来」の「現代思想」の所在を探つて、「かのやうに」が明治四五年、「妄想」や「なのりそ」が四四年、「青年」が四三年と溯って行くと、鷗外が文壇に「復活」して華々しい活躍を開始した四二年に到つて漸くそれらしいも

のにつき当った。この年の十月に「太陽」の第十五卷第十三号に掲載されたリルケ (Rainer Maria Rilke) の「家常茶飯」(Das Tägliche Leben) の翻訳と、記者との一問一答のかたちでリルケを紹介した「現代思想」なる一文がそれである。周知の通り、本邦に於けるリルケの紹介は、これを以て矯矢とする。また、五月には、「追離」がそれを予告するように発表されている。明治四二年 (一九〇九) といえば、リルケは未だ三十三歳。鷗外は、「僕なんぞよりは殆ど二十年も若い。倅に持っても好いやうな男です」と云っている。従って、彼地でも、リルケの研究は、鷗外も「私もよくは知りません。誰も知らないでしょう」と云っているが、未だ初期のことで、鷗外が披見したと思われる Friedrich von Oppeln-Bronikowski : Rainer Maria Rilke. (Mitteilugender Literarhistorischen Gesellschaft Bonn. Dortmund. 1907) も余り正確なものではない由である。

ところで、「家常茶飯」の第一場で、畫家のゲオルク・ミルネルと姉のゾフファイの間に次の様な對話がある……
畫家。でも姉さんが、朝から晩までおつ母さんに付いて世話をするのは、随分苦しいでせう。長年の事だから。何んでも年寄といふものは、どんなに世話をしても、それを有難いなんぞと思つては呉れないものです。それに病氣でもあると癩癩を起して無理な事もいふでせう。随分つらからうと、僕だつて察してゐますよ。

姉。お前がさうお言ひなら、わたしは打明けてお前に言ひませうがね。實はわたしがおつ母さんの世話をするのも、因襲の外の關係なので、わたしは生涯をその關係に委ねたといふものかも知れませんよ。……實はね。おつ母さんといふものには、とうに別れてしまつたかも知れないのですよ。そしてわたしは或縁のない人に出くはしたのね。その人が人手を借らなくつてはどうする事も出来ない。可哀相な人だもんだから、わたしはその人に世話をしてやつて、その人の爲には、わたしがゐるなくなつては、どうもならないやうな工合になつたのね。晩方に窓掛を締めてやれば、その人の爲には夜になり、午前ひるまえに窓の戸を明けてやれば、その人の爲には朝になるでせう。物を喰べさせるのも、薬を

飲ませるのもみんなわたしの手でするのでせう。さういふ風にその可哀相な人はわたしに使えるのだから、わたしは又その人の助になるのを自分の爲事にしてゐるのです。それが今お前に言はれて見れば、わたしのおつ母さんなのね。そうして、鵬外は「現代思想」の中で、この条を次の様に解説している……

……それは此脚本の主意でもなんでも無い、只その中のエピソードに現れてゐる一事件です。主人公の畫家の姉えさんとおつ母さんとの関係です。姉えさんがおつ母さんに對してゐる所を見ますと、其形跡から見れば、天晴孝子です。よめにも行かないで、一身を犠牲にしておつ母さんを大切にしています。そこでその思想はどうです。あの弟との對話をよく讀んで御覽なさい。われわれの教へられてゐる孝と云ふ思想は跡形もなく破壊せられてゐます。決して母だから大切にするのでは無いのです。そこで今ここに一人の葡萄酒茶式部があると想像して御覽なさい。そしてその娘もおつ母さんを大切にしているのです。此娘は高等の教育を受けたので、英語が讀めます。そこで現代詩人の作を讀んでゐるのです。此娘の思想は、脚本にある姉えさんの思想と違つてゐるでせうか、同じでせうか。一寸これだけの事も考へて見れば、深く考へて見れば、倫理上教育上の大問題です。

続いて、鵬外はバアナアド・シヨオの「悪魔の弟子」の主人公ジック（悪魔の弟子）の場合を例にとつて、偶然訪ねた牧師の家で、折から不在だった牧師と間違われて敵兵にとらわれるが、牧師には、何の恩義もないのに、牧師の為に間違われた儘連行されてゆく、そのヂックは「非常な仁人とか義士とかに見えるでせう。併しヂックの思想はわれわれの教へられてゐる仁だの義だのと云ふものとは丸で違つてゐるのです……「家常茶飯」の畫家の姉えさんの孝行と好く似てゐます。かふいふ處を考へて御覽なさい、どれだけの大問題が此中に潜んでゐるかと云ふことがわかりませう。そこでこんな風な考も、勢起らずにしまふわけには行きますまい。一体孝でも、又仁や義でも、その初めに出來た時のありさまは或は現代の作品に現れてゐるやうな物では無かつたのだらうか。全く同一で無いまでも、どれだけか似た所の

のある物だったのではあるまいか。それが年代を経て、固まつてしまつて、古代宗教の思想が、寺院の掟になるやうに、今の人の謂ふ孝とか義とかになつたのではあるまいかと、こんな風な事も思はれるでせう……」と、人間関係の眞実の姿は、我々が「因襲の外に」出たとき、初めて所謂時間の觀念を超越した永遠の姿に於いて啓示されるのだと云う「家常茶飯」のテーマに触れている。これは、「追難」の末尾近くに、「Nietzsche に藝術の夕映といふ文がある。人が老人になつてから、若かつた時の事を思つて、記念の祝をするやうに、藝術の最も深く感ぜられるのは、死の魔力がそれを籠絡してしまつた時にある。伊太利には一年に一度希臘の祭をする民がある。我等の内にある最も善なるものは古い時代の感覺の遺傳であるかも知れぬ。日は既に没した。我等の生活の天は、最早見えなくなつた日の餘光に照らされてゐるといふのだ。藝術ばかりでは無い。宗教も道德も何もかも同じ事である」という條に照応するのではないか。

鷗外の最初の口語体小説である「半日」が書かれたのも、この年の三月であつた。妻の精神が異常なのではあるまいかと考へたり、「精神の變調でないとするれば、心理上に此女をどう解決出來よう。孝といふやうな固つた概念のある國に、夫に對して姑の事をあんな風に云つて、何とも思はぬ女が、どうして出來たのか。西洋の思想から見ても、母といふものは神聖なものになつてゐるから、夫に對して姑を侮辱しても好いと思ふ女は先づあるまい。東西の歴史は勿論、小説を見ても、おれの妻のやうな女はない」と慨歎する「半日」博士の腦裡にも、この「家常茶飯」のテーマが思い浮かべられていたのではあるまいか。

「家常茶飯」では、この後、画家の家を訪ねて來た「學醫士ロイトホルト」と姉と画家の間で、次の様な會話が交わされる……

學士。……一體新思想といふものが、もう纏つて出來てゐるのかどうか、もう少し待つて見なくては分からないと思ふのですから。……わたくしの考では、破壊せられた舊思想が、隨即新思想だとは認められないやうに思ふのですよ

畫家。それでも君も舊思想が取附けられてしまふといふことだけは認めてゐるのですね。

姉。そしてそれを取片降けるのが當然だといふことも認めて入らつしやるのでせう。

學士。さうなると、一度にはちつと問題が大き過ぎますね。事によつたら骨を折つて舊思想を破壊するのも徒勞ではないかと思ふのです。なぜといふのに、折角舊思想を取片附けてしまつても、その跡の、石瓦に覆はれた地面の上には新思想は芽ざして來ないかも知れませんから。新思想の生えて來るには、何處か別に新しい地面が入るのではないでせうか。

姉。それではあなたは、この世界にまだどこか人の手の觸れない新しい土地があるやうに思つて入らつしやいますの。學士。ええ。もし人の手の觸れない土地がもうないといふ段になれば、それは新しい土地が海の中から湧き出ても好いでせう。

畫家。君は詩人ですね。

學士。さうですね。詩人なら、君なんぞの讀まない舊派詩人でせう。

畫家。いや。僕は新派も舊派も讀みませんよ。妙な工合で、僕も誰かの句が氣に入つて覺えてゐることはあるのです。

それがロオマンチックの詩人であつたり、デカタンであつたりするのです。佛蘭西、伊太利、獨逸、露西亞、どの國のものだか分らなくなることもあるのです。氣に入つた句は、どの詩人のももみんな一人で作つたもののやうに、僕には思はれるのです。

學士。そりやあ、それも一理ありますよ。どの詩人の背後にも唯一の詩人がゐるのでせうから。

畫家。ふん。神だといふのですか。

この辺りは、「現代思想」で「現代詩人の中には階分敬虔なやうな、自家の宗教を持つてゐるらしい人があるのです

からね。リルケなんぞも其方ですよ。かうなると、一面解決の端緒が見えさうになると共に、一面問題は愈々大きくなるでせう。併しよしやそんな風に根本の観念は生まれ變つて來るかも知れないとしても、宗教上に寺院の破壊が大事件であると同じわけで、固まった道徳観念の破壊も大事件に相違ありません……」という条に相当する。これは「五條秀曆」ものや「妄想」の系列に於いて鷗外の手繰った思索の糸の原形ではあるまいか。「現代思想」では言及されていないが、「家常茶飯」の第二場で、因襲の外の尺度ではなく、日常生活のそれで量れるような幸福はないかという画家の問に対して、ヘレネから「この部屋の中に」は、「餘程前から」「さういふ幸福の影が漂つてゐる」「その隠れた幸福と、あなたの生活とは、息が合つて」いるように、「一つの呼吸をしている」「いつも傍にいて、あなたの目に留まらないやうな人がいるのではないか、その人は餘りあなたの生活に密接な關係を持つているので、あなたは、それを家常の茶飯のように思つて氣附かないでいるのではないか」と「日常生活の裡に潜む幸福」の存在することを示唆されるところも「妄想」の所謂「日の要求」云々の条や、「高瀬舟」の「喜助」などの発想法にも関連しているようだ。

「ケルンテン」に代々土着して、「幾百年かの」「因襲」に「縛られ」た「森のなかなる七つの城に、三枝に花を咲かせた」貴族の家に生まれ、思想も貴族的で、ゴビノオやニイチエに似て「先祖自慢」する、「日本人に余り縁遠くない、細おもての容貌で、眼光が炯々としているのに、エルレン・ケイにも似た女性的なおとなしい人」、ドイツ・フランス・イタリアと、「歐州大陸を半分位」も旅して、「同臭のものを尋ね」廻り、その作風は、「イプセンのやうな細工もないが、底には幾多の幻怪なものが潜んでゐる大海の面に、可哀らしい小小波がうねつてゐるやうな」、或は、「シヨパンの音楽のやう」に「優しい、情深い、それかと思ふと、勿然武士的に花やかになつて、時として殘刻にもなるやうな慮がある」「社會」に対する態度には、「トルストイ臭い所もあり」「都會嫌」だが、「ハウプトマンは大好」、ロダンに傾倒して、「ロダンの仕事場に入り浸りにな」り、「ロダンを評したのだから、自家の主観を吐露したのだから分らないやうな、

頗る抒情的な本」を書き、「今の大陸の歐羅巴は死んだ歐羅巴だと云ふので、エネチアを愛して生氣のあつた時代の遺跡を慕つて（過去の岸に沿うて船を行る）」と云うリルケ。「多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつた」と歎く鷗外は、どうやら、リルケの裡に、彼を慰藉するに足る側面を可成多く見出していたのではあるまいか……「現代思想」で「先頃我百首の中で、少しリルケの心持で作つて見ようとした所が、ひどく人に馬鹿にせられましたよ。」と云っている。「我百首」〔昂〕明治四二年五月）に収められている。

彼人はわが目のうちに身を投げて死に給ひけむ來まざりぬ

み心はいまだおちるず蜂去りてコスモスの莖ゆらめく如く

などが、それではないか。

また、リルケの作品の翻訳は、この後、翌年の一月に「白」(Weisses Glück)が「趣味」の第五卷第一号に、「駆落」(Die Flucht)が、明治四五年一月「女子文壇」の第八年第一号、「老人」(Greise)が、大正二年一月「帝國文學」の第十九卷第一号に、そうして、大正五年一月「白衣の夫人 海邊に於ける一場」(Die Weisse Fürstin Ein sscene am Meer)……「演藝畫報」第三年第二号と、「家常茶飯」共々、五篇にも及んでいる。

創作では、「牛鍋」(明治四二、「心の花」)の「永遠に渴してゐる日」の女、「電車の窓」(明治四三、「東亜の光」)で、「僕」に「窓」を閉めてもらった女の瞳が語る「あなたのなすつた事は報のためになすつたものではございません。事によつたら、わたくしのどこかがお氣に召して、お慰になつた故だと仰やるかも知れませんが、それは報のためになすつたといふものでございません。何事を致すにも、その位の機勢はざまは無くてはなりません。それは報のためとは申されません。若しそんな機勢も無くて何か致すのが宜しいのでございましたら、それは理窟であつて、思慮があつて致すので、その致す事が温みの無いものになつてしまひませう。あなたが報のため無く、わたくしにお手をお借しなされたのが、わ

たくしは嬉しうございます。わたくしにはあれだけの事も、世の中にまだ身勝手や慾心からで無く、何かしらする人のある兆のやうに思はれます」とある条にも、リルケの姿が投影しているように思われてならない。

愛妾の許に走った儘長い年月の間帰らなかつた夫がいよいよ今日帰るといふ知らせを受けて喜ぶ「白衣の夫人」に妹のモンナ・ララが、姉えさんはよくそんなに長い間、我慢して入らした、妾なんぞにはとてもできそうにない、どうして我慢していたのかと質すと、夫人は「それはわたしの血も湧き返つてゐたのだがね。どうかするとわたしの血の叫ぶ聲に、わたしは夜中に目を覺して、わたしの泣いてゐるのに氣附いて、暗の中で一人笑つて、わたしの枕を、裂けるほど噛んだ事もあるのだよ。頂度或るさう云ふ暗の事だつたが、わたしは今でも覚えてゐる、守本尊のクリスト様を十字架に附けた膠がとけて、お姿が落ちて來た事がある。わたしの熱はそれほどだつたのだよ。雨臂を伸ばしたお姿が、わたしの衾の上に俯伏しになつてお出なすつた。」と云う。ララが、「それでも、姉えさん、あなたには強い力がおありなすつたのですね、」と感動すると、「なに、それは力ではないのだよ。それは只慾なのだよ。物惜しみなのだよ。わたしは後々の一夜の爲めに何年かの間火を養つて置いたのだ。その一夜が今來るのだね。わたしの顔は美しい。わたしの軽い足の下を、大地が一叢の雲のやうに支へてゐる。もうあしたはわたし年が寄つてしまつても好いのだよ。」と云う、この「夫人」の姿勢は「忍従」そのものである。而も裡に劇しい嵐を蔵している。

ララはいよいよ感動して、「姉えさん。あなたの体からは豪光がさしてゐますわ。あなたには女王の強さがおありなさいますね」と云い、「わたしは身の限り心の限り、あなたの爲めに盡してお上げ申したいわ。」と云つて、姉の前に跪く。このララの姉への奉仕の心も、「足腰の立つ間は、よしやお暇がなくても、影の形に添ふやうに離れぬ」と誓う「文吉」のそれを思わせ、安壽も「豪光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を赫かしてゐる」のである。「安壽」を「白衣夫人」に、「厨子王」を「ララ」に見立てみると、夫人の衾の上に落ちて來た守本尊のクリスト像までが、どうやら地

藏尊のお守りに何か関係があるのではないかとさえ思われて来る。「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。」と厨子王に云いきかせ、たとえば、どんなに責められても耐えてみせようと云つてのける、この辺りには、「白衣の夫人」の「忍従」、「家常茶飯」のソフファイの「献身」の倂が覗れる。「今は音を忍が岡の時鳥いつか雲井のよそに名告らむ」と「流儀違の和歌」を書いた安井仲平。「お佐代さんが奢侈を解せぬ程おろかであつたとは、誰も信ずることが出来ない。又物質的にも、精神的にも、何物をも希求せぬ程恬憺であつたとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんには慥かに尋常でない望があつて、其前には一切の物が塵芥の如く卑しくなつてゐたのであらう。

お佐代さんは何を望んだか。世間の賢い人は夫の榮達を望んだのだと云つてしまふだらう。これを書くわたしもそれを否定することは出来ない。併し若し商人が資本を卸し財利を謀るやうに、お佐代さんが勞苦と忍耐とを夫に提供してまだ報酬を得ぬうちに亡くなつたと云ふなら、わたくしは不敏にしてそれに同意することが出来ない。

お佐代さんは必ずや未来に何物をか望んでゐたらう。そして瞑目するまで美しい目の視線は遠い、遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる餘裕をも有せなかつたのではあるまいか。其姿の對象をば、或は何物ともしかと辨識してはなかつたのではあるまいか。……この「安井夫人」にも、「無償の献身」「忍従」「奉仕の精神」「運命への全き信頼」そうして「因襲の外」にある永遠の生への渴仰が見出される。而して、「ぢいさんばあさん」の「るん」の献身と云い、「最後の一句」の献身と云い……、青年の「利他的個人主義」と云い……どうやら四二年以降の鷗外にとって、「リルケ」は身を寄せる可き有力な「壘」であり、「脱帽」するに足る若き「師」であつたことは間違いなさそうである。そうして、安寿やいちの献身の出所を追求して、リルケにつき当ってみると、何事につけても非常に高い要求を持っていた鷗外が、創作の上に、或は翻訳の上に、こうした型に近い女性を多く書き出したのは元より自然の成行

であつたし、母の死の近いことを予想して、「山椒大夫」と云う彼の夢を託するに最も恰好なキャンバスを用意した彼が、幼い頃の母の佛を思い浮かべ乍ら、説教節の中の素朴な物語を下図に、「リルケ」という絵具をたっぷり盛り上げたパレットを片手に、存分に刷毛をふるって画き上げたのが安寿像であつたと観るのが妥当ではなからうか。そうして先に掲げた第二第三の型に近いと思われる女性を画いた翻訳作品の系列にもまた、リルケの「壘」に拠つた鷗外が八方に伸ばした探索の網で採集されたものが可成あると観てもよいのではなからうか。

その意味でデエメル (Richard Dehmel) の「顔」(Das Gesicht) を今少し検討してこの稿の結びとしたい。鷗外が翻訳した Dehmel (1863~1920) のもので、小説はこの「顔」一篇だけであるが、「沙羅の木」には「海の鐘」をはじめとして九篇の抒情詩を訳出しているし、デエメルの紹介に代えて、「リヒアルト・デエメルが換他利労働者唱歌組合新聞に投ぜし自記の略傳」なる長い表題の下にその全文を、明治四一年一月、雑誌「詩人」の第八号に訳載している。また、底本には彼の全集 (Richard Dehmel, Gesammelte Werke, 10Bdc. 1906~09. Berlin, S. Fischer) を用いているから、このブランデンブルグ地方出身の詩人には可成心を寄せていたものと想われる。「自記の略傳」によると、Spree 林に近く Wendlich-Hermsdorf で山林官の長男に生れた Richard は非常な秀才で、ダンチヒ大学では哲学と自然科学と社会学を専攻、「保険事務に關する卒業論文」でドクターの学位を取得している。その直後「獨逸火災保險會社の書記」に任命され、一八九五年まで勤務したが、生来の奔放な性格故に「該會社の煩瑣なる俗務」には耐え難く幾度か投げ出そうとしたこともあるが、それはまた少なからず自制の修練にもなつたと云っている。それでもその「煩瑣なる俗務」の間を縫って三巻の詩集を公にできたのは、「鳥の籠中に入りて、初めて能く歌へるが如くなりしならん」「自由を求むる情の、あらゆる藝術の最初の動機たるを認めざること能はず」と云っている。だが、「自個の藝術家としての活動力に」自信が持てる様になるまで公職を辞さなかつた。その間七年半。従つて、詩人を本業として立つ

たときには三十二歳になっていた。一八九八年、合意の上で「初めの妻」と別れて「今の妻」と結婚した。「其理由は初めの妻に對するより、一層強大なる戀愛の余が意志を左右せしものありしが爲なり」と云い切っている辺り、實にはつきりしたものである。次いで「今の妻を伴って、『伊太利、希臘、和蘭、瑞西、英國』と歐羅巴の大半を旅してから Hamburg 附近の Blankenese に居を構えた。この「略傳」を書いたのは、彼の最大傑作である「二人」(Zwei Menschen)の終章「純粹」を執筆しているときと云うから、明治三六年(一九〇三)のことであろう。「Goethe, Byron 以來、前人の百方之を求むれども得ること能はざりし、現代叙事詩の形式を成就したるものと信ず」と自負するだけであつて、「認識」「幸福」「純粹」の三部から成り、各部夫々三十六の物語詩を含むこの對話形式の韻文小説は官能と思想を統一し内容と形式との均衡を得た完全な作品と云われる。また、「吾家の小兒三人の爲に」先妻と合作した「唱歌集」Fitze-Butze もある。尚、付記すると、第一次大戦には義勇兵を志願し、従軍記録として、Zweischen Valk und Menschheit (民族と人類の間)を出したが、戦傷が元で病歿している……。

鷗外が Dehmel の略傳を敢て訳出したのは、Dehmel の紹介が目的であつたには違いないが、彼のこうした経歴から推して、鷗外自身、彼に近しいものを感じていたからであろう。作風も初期の自然主義的傾向から印象主義のそれへと移行し、従つて、創作態度も社会的な或は愛慾的なそれから、冥想的な或は神秘的な色彩を濃くしていつている。「顔」にもそうした傾向が多分に覗れる。

……彼の妻、彼女は「足を太く腫れさせて寝てゐる主人を、烟の渦巻く二階の寢床から救い出した。それは「殆ど男も及ばぬ程の力」であつた。而も、「止めるのも聞かずに」駆け上がった、「飛びちがふ焰を冒して、「今彼が見ているこの画面を救い出した。だが妻は大火傷を負うて、美しかった顔も焼け爛れて見る影もなくなつてしまつた。妻が身を挺して持ち出したこの画布に画かれている「水仙の花を持てる裸婦」の顔は美しかった時の妻の顔である。彼女はモデル

であったのである。彼は画布を前にして彼女の眼の裡に潜む「美」の本質に迫った時に、同時にその本質を形取っている。「女」の姿も見た。「新たに捕へた表情、人に求むることあるが如き無慾の表情を捕へ得た」彼は嬉しさの余り彼女を抱きしめた。だが、「運命は實に残酷な、無意味に残酷なものである。」「夢のやうな嬉しさ」の裡に彼女を担いで椅子を飛び越えた時足を挫いてしまった。焰に抱まれた妻を眼前に、彼は徒に悶え苦しんで見ていなければならなかった。その画は傑作であったのに彼は公にしなかった。それは、何故彼がこの画布に画かれた彼女の「顔」を愛したのかという謎が未だに解けないからである。この人を魅する不思議は日に有るものでもなければ口元に有るものでもない。不思議はただ或る表情にある。そうして、その表情をもう少しで捕えられると思った所で……。いっそあの時妻が死んでしまったら、併し妻は現実に生きている。ではこの画を売るなり砕くなりしたら。それでも「記念」は残る。妻が生きている限り「記念」は消えぬ。妻を離別したら。芸術の為の良心は有ってもいいが、人生を生きてゆく為には良心なんぞは邪魔にかならぬ。彼女は大学教授の娘で伶俐な女であるのに自分の為に火傷を負い親族から見放されている。可哀想ではある。だが、「元々、あの女はさう成る可き運命を持つていたのだ。」「あの女の意志」だったのだ。彼を愛し彼を救い彼を苦しめている女。愛の人、罪の人、マグダレナ。彼は絶望して呻く。その声をききつけて妻が入って来る。だが彼の心を察して又出て行こうとする。その時、彼は彼女の醜くひつつれた顔の裡に今まで見えなかったものを見た。「未知のもの、最後のもの、唯一のもの」が。あの謎が解けた。それは彼女の「大いなる徳義」であった。「氣高さ」と「何物にも打ち勝つ謙讓」であった。画家は云った……「今度おれがお前をどう書くか知つてゐるか。暗と風雨。松明の火。ただ眼と運動と。マグダレナが喜んで耶蘇を抱き下ろす所を書く」と。「十字架から」と心の裡で妻がつけ加える……。

忍従、絶望を通じて拓ける運命への信頼、獻身、犠牲、因襲の外に於ける愛の真実、といったリルケのそれに通ずる

ものが、この一篇の裡にも盛り込まれている。また、所謂、「器量好み」と云われた鷗外、「醜女」を極度に嫌悪した貴族主義の鷗外。だが、福笑いのような顔であった「金毘羅」(明治四二年十月「昂」)のお栄さんを、「段々年を取るに連れて、才気の優れた、意志の強い人の表情が、顔に凝結して、ちつとも可笑しいことはなくなつてゐる」と云い、「人の體も形が形として面白いのでありません。靈の鏡です。形の上に透き徹つて見える内の焔が面白いのです」と「花子」(明治四三年「三田文学」)の末尾にロダンの言葉を書く鷗外でもあつたのである。

(後記) リルケと鷗外文学との交渉に就いては、馬場久治氏が「森鷗外とライネル・マリア・リルケ」を「鷗外研究」二五号に、富士川英郎氏が「鷗外とリルケ」を同誌二六号に、(執れも昭和一三年)、翌年の同誌二九号に、片山敏彦氏が「鷗外とリルケ」を、下つて、昭和三七年、菊田茂男氏が「日本文芸研究会」で「森鷗外の歴史小説―リルケの影響を中心として―」を發表されているので、決して目新しい着想ではないが、これは、鷗外の翻訳文学に手をつけた以上、どうしても素通りを許されない関門と思うので、先輩諸氏の御研究を参照させていただき乍ら、私なりに、表記のテーマの下に、この問題に触れてみた。

一九六四・八・二九